

risei + trip

vol.

25



特集

いま、輝く女性トレーナー。

いま、輝く女性トレーナー。

スポーツ現場は、誰もが力を発揮できるチャンスにあふれている。女性アスリートの競技人口の広がりに呼応するように、

選手を支える女性トレーナーの姿を目にする機会が多くなった。

トレーナーとは、一体どんな力が求められるのだろうか。

第一線で活躍してきた女性トレーナーたちの言葉から、その答えを探る。



photographs by Naohiro Kurashina



1 AT実習は姉妹校である履正社高校などで、年間を通して一つのチームを担当 2 学生に指導する水谷先生。学生の疑問や不安に向き合い、安心して挑戦できる場を作っている 3 日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー理論試験合格者数は6年連続関西No.1(当校調べ)

2020年に横浜DeNAベイスターズが日本プロ野球界初の女性アスレティックトレーナー(AT)を採用した。かつては男性が中心だったスポーツ業界でも、性別関係なくATを目指す人は年々増え、女性が活躍する場は確実に広がっている。

バレーボールSVリーグ・大阪マーヴェラスのヘッドトレーナーを務める永安夏未さん(なかみ)もその一人。中学2年生のとき、右膝のケガがきっかけで通い始めた病院で出会ったのが、リハビリ担当のATだった。

チームに求められ続ける理由とは。

この出会いがきっかけとなり、スポーツが好きだった彼女はチーム専属のトレーナーを夢見て、履正社専門で学ぶことを決意した。

在学中は人一倍、現場経験を積んで、トレーナー活動への自信に繋がっていったという。

「ATの現場実習の期間が終わっても、アスレティックトレーナーコースの先生にお願いして、ラグビーやバスケットボールなどの実習に連れて行ってもらいました。やりたいことを言葉にしたら、挑戦させてもらえる環境が履正社にはありました」

将来はスポーツチームに就きたい。その熱い思いを学内外の多方面にアピールしていたこともあり、教員の人脈を通じてチームに採用された。

トレーナーとして活動して9年目。今もなお彼女がチームに求められ続ける理由は何だろうか。

「トレーナーとして大事なものは、選手やスタッフ、チーム全員とのコミュニケーションが取れること。どんなにトレーニングが上手くても、コミュニケーションが取れないとチームは回りません。他愛もない会話ができるぐらいの関係性になれば、自然と信頼関係も深まります。そして何より、現場を楽しみ、『チームを支えたい』という思いが一番に持ち続けることが大切です」

2025年にATコースへ入学した学生の性別に大きな偏りはなく、女子学生の割合も年々増加している。永安さんのように女性トレーナーを目指すことはもはや珍しいことではなく、学びの場でもその広がりははっきりと表れている。実際に、スポーツチームに採用される卒業生は後を絶たない。

現場で即戦力を育てる実習カリキュラム。

本校のAT実習は姉妹校の履正社高校など、全国レベルで活躍するスポーツ強豪校で実施される。少人数制のため、学生一人ひとりにきめ細かな指導が行える点も特長だ。また、本校には日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー資格を持つ教員が10名以上在籍しており、その数は全国でも最大級を誇っている。

ATコースの水谷麻紀先生は、過去に実業団バスケットボールチームで12年間のトレーナー経験を持つ。同チームは国スポ北海道成年男子代表の母体になり、自身も国スポに3回帯同した。現在は履正社高校女子硬式野球部で、ATを目指す学生の指導を担当している。

「私が12年間もトレーナーを続けられた理由は、選手やスタッフとの信頼関係があったからだと思います。選手が最大限の力を発揮できるようにサポートし、不調を感じたら見逃さずに声をかける。チームはトレーナーが信頼の置ける人物かどうかを見えています。なので、実習では私自身の経験を踏まえ、信頼関係を築く大切さを学生に伝えています」

ATの資質として求められるものは、「コミュニケーション」と「スポーツに関わりたい」という強い気持ち。この二つがあれば、誰もがATになれる可能性がある。と先輩たちの言葉から知ることができた。

「将来、プロスポーツチームのトレーナーになりたい」。その思いを抱いているのであれば、ぜひ本校で学びの一步を踏み出してほしい。